

## 『嵐ヶ丘』にみる作品構成の諸相

山 田 隆 敏\*

Some aspects of the story structure in Wuthering Heights

Takatoshi YAMADA

## 要 旨

Emily Brontë の Wuthering Heights は、Charlotte Brontë の Jane Eyre や、Ann Brontë の Agnes Grey とともに Brontë 3 姉妹の代表的作品となっている。Emily はこの作品のみで英文学史上に名をなした作家であるが、29才の若さでこの世を去っている。彼女はこの作品に全身全霊を込めたと断定しても過言ではあるまい。

この作品は Yorkshire の一地方作品にとどまらず、彼女の内面世界を散文化して、空間的・時間的にも無限定な世界的作品となっている。この概念が全世界の読者を魅きつけている源といえよう。

この作品は Heathcliff と Catherine の愛を描いた作品であるが、この2人の絡みは34章中16章目で終わっている。その後半は、彼等の愛を妨げた社会に対する復讐の劇中劇となって展開されている。

今回は storytellers による〈語り手の2重構造〉と〈家・荒野・愛そして生と死の側面にみられる2重構造〉についてふれてみた。

この作品はヒースクリフとキャサリンの愛の物語であることは言うまでもないが、ヒロインのキャサリンは途中でなくなるため、作品全編が恋愛物語とは言えない。彼女の死は作品34章中16章目である。その後、彼等の恋の成就を妨げた社会に対する復讐が展開されてゆく。混乱、憂鬱、危機、絶望と社会が変化し、秩序が崩壊した混沌状態の中で、キャサリン・ジュニアとヘアトンの愛の姿を描く場面が連綿とつづく。この作品の構成の特徴のひとつは、「二重語り」の構造である。最初の語り手 (First teller) は都会の喧噪から逃れ、スラッシュクロス屋敷の住人となったロックウッド氏である。その彼が勝手な憶測を交え話を進める。話し始めは1801年であり、その途中から過去(25年前)の事実を知り、家政婦エレン・ディーンに昔話を依頼する。彼女が第二の語り手 (Second teller) となる。彼女の人柄をエミリーは次のように述べている。

I certainly esteem myself a steady, reasonable kind of body; but I have undergone sharp discipline, which has taught me wisdom: and then, I have read more than

you would fancy, Mr. Lockwood. You could not open a book in this library that I have not looked into, and got something out of also: unless it be that range of Greek and Latin, and that of French; and those I know one of from another; it is as you can expect of a poor man's daughter. (VII.89)<sup>1)</sup>

彼女はこのように看過できない文才の持主である。彼女の語りによってヒースクリフとキャサリンの異常な愛憎が発展する。また彼女はその語りの中にも登場する。家政婦として、場面状況の蔭の代弁者＝第3の語り手 (the Third teller＝the narrator) として、その役割を果たすことになる。語りの場面は語り手の健全な価値判断又は日常的な常識規範によって様々な場面に生き生きと再現される。反面、語り手のさじ加減ひとつによって登場人物の運命は木の葉にほんろうされる状態を、この作品はこまかく表現している。だから語り手の二重構造はこの作品の大きな特徴となっている。

次に〈家と荒野〉のテーマで作品を考えると、キャサリンとキャサリン・ジュニアの間には、思考方法の面で明らかな二重構造が存在する。〈家〉のイメージには、家と家族の両面が考えられる。作家エミリーは *Wuthering Heights* と *Thrushcross Grange* の両家とその家族に、まず対照的な人格と特質を付与している。まずはじめに、*Wuthering* とは「空が荒れる、風が荒れ狂う」の意味である。それ故にこの屋敷は嵐に吹きさらしにされる処となる。これと対照的に、*Thrushcross* の *Thrush* とは、「鶉」のことで、*Thrushcross* とは「嵐とか風を逃れた小鳥達が寄り集ってさえずる」処となる。*Wuthering Heights* は豪農の家庭であり、*Thrushcross Grange* は保安判事の家である。当然のことながら家庭内のムードでも両家は異なる。*Wuthering Heights* の生活の中心は戸外であり畑である。「自然状況に日常を任せる動的な家庭」である。一方、*Thrushcross Grange* の生活の中心は家庭内であり、「文化的で静的な家庭」である。家族の子供達の性格も大まかに「本能的」と「知性的」に大別できる。特に *Heathcliff* は「ヒースの生い茂った崖」の意味である。いみじくも、それは「荒野に咲く花は野性的イメージ」を有し、嵐の吹きさすさぶ所でも、力強く咲き乱れるという、野性的で生命力の強さを併せ持った人間の性格を表現する言葉となっている。

おまけにこの *Heathcliff* は *Earnshaw* 家の死亡した息子の名である。いわれのある名前をもらった彼は文字通りに家庭内に、嵐と、静いをひき起こす。義父とキャサリンを除く家族の者との間が気まずくなるにつれ、ヒースクリフとキャサリンの日常生活は、家庭内から荒野へと移る。荒野こそが彼等の家であり、家庭となる。いっぽうキャサリン・ジュニアにとっての「家のイメージ」は、母キャサリンが抱いたものと、明らかに違うものであった。

Till she reached the age of thirteen, she had not once been beyond the range of the park by herself. Mr. Linton would take her with him a mile or so outside, on rare occasions; But he trusted her to no one else. Gimmerton was an unsubstantial name in her names; the chapel, the only building she had approached or entered, except her own home. *Wuthering Heights* and Mr. *Heathcliff* did not exist for her. (XVIII,210)

次に〈荒野〉のイメージにも明らかな二重構造が存在する。キャサリンにとっての荒野は、生きる喜びを与えてくれるものである。それが〈家〉となり〈小宇宙〉となるわけである。〈小奥様・女王様〉になれるキャサリン、〈召使・仲間〉になれるヒースクリフ達にとって、荒野の世界は彼等が自由に心を通いあわすことのできるエデンの園であった。彼女はすすんで *Gondal* の女王をめざし、文明・文化的なものよりも、荒野的・野性的なものに価値感と人生の充実感を置く女性となる。

Oh! I'm burning! I wish I were out of doors! I wish I were a girl again, half savage and hardy, and free... and laughing at injuries, not maddening under them! Why am I so changed?... I'm sure I should be myself were I once among the heather on those hills. (XII.150)

エドガー・リントンに嫁いでからも、彼女の心の中に、永遠の荒野が存在していたのである。次にキャサリン・ジュニアは、〈荒野〉を moors の外側の社会への通過点と考えているふしがある。

'Ellen, how long will it be before I can walk to the top of those hills? I wonder what lies on the other side—is it the sea? And what are those golden rocks like, when you stand under them?' she once asked. The abrupt descent of Penistone Craggs particularly attracted her notice. (XVIII. 210)

彼女は成長とともに、まだ見ぬ Wuthering Heights、まだ会えぬ Earnshaw 家の人々への願望が強くなっていった。さて、以上の内容をふまえて、さらに作品構成の諸相を論及する。

1. Double Catherine にみる「愛」の概念、2. 「死」と「生」。これらの主題こそ、エミリー・ブロンテの文学作品の価値を決定するものであろう。

### § 1 Double Catherine にみる「愛」の概念

故アーンショウ氏がリヴァプールで拾ってきた〈悪魔の賜物〉のような黒い肌の子、アーンショウ家の亡くなった息子の名をもらった子、そして故アーンショウ氏から溺愛された子。それがヒーローのヒースクリフなのである。彼は娘のキャサリンと仲が良かった。父から与えられた馬の件で兄ヒンドリと仲違いをしたり、読書を強制されると、キャサリンは〈救生の鉄かぶと〉を、ヒースクリフは〈亡びの大道〉を犬小屋に投げつけた。また下男で説教ずきなジョーゼフや、兄のヒンドリー夫婦から叱られると、大好きな荒野へ逃げた。荒野こそが彼等の人間性を成熟させる世界であった。二人とも〈荒野の申し子〉であった。Heath+cliff (ヒースの茂る崖) はこれにふさわしい名である。I am Heathcliff。これはキャサリンの愛の概念である。「私こそヒースクリフである」「私はヒースクリフと一体である」「私達の魂は同じである」「彼は私以上に私である」「私こそが荒野の申し子である」と解釈できよう。この中で、最後の解釈が彼女又は彼らの愛の概念を最も本質的に表現していると私は考える。彼女はこの愛の概念を生涯を通じて守り抜くために、「エドガーと結婚するしかない」と、苦しい胸の内をネリーにこぼすのである。ところが、この愛の概念を結婚に結びつけることで、精神面の再構築を願望していたヒースクリフにとって、彼女の言葉は激しい衝撃となった。彼は穏していた狂暴性をむき出しにして復讐を始める。この概念を社会的経済的手段で守ろうとしたキャサリンに対し、彼と夫の確執は、彼女の体力を極度に衰えさせた。そして彼女の精神構造は次第に幼児期の野性に戻っていくのである。その後、彼女は娘キャサリンを出産して死ぬことになる。

彼女の死後20年、Wuthering Heights でロックウッド氏は彼女の霊的現象を見る。幼児期の女性の顔である。この現象は次のように考えられる。They do live more in earnest, more in themselves, and less in surface change, and frivolous external things. I could fancy a love for life here almost possible; and I was a fixed unbeliever in any love of a year's standing. (VII.89) これは〈無理やり引きはなされた愛、一体となろうとする情念が嵐を呼び、生きている者は復讐を、亡くなったものは愛を求めてこの世に出現する〉

現象なのである。かくもキャサリンの愛は悲劇的である。次の三つの命題がこれを証明する。  
 (1) 暴君 (キャサリン) は奴隷 (ヒースクリフ) を踏みつけるが、奴隷は暴君に仕返しをせずに、自分の下のものを踏みつける<sup>2)</sup>。(XI.137)

(2) 「隣人の物はつまり私のものじゃありませんか!」「それがかりに私の物になっても、やっぱりあなたの物に変わらないだ」(X,132)

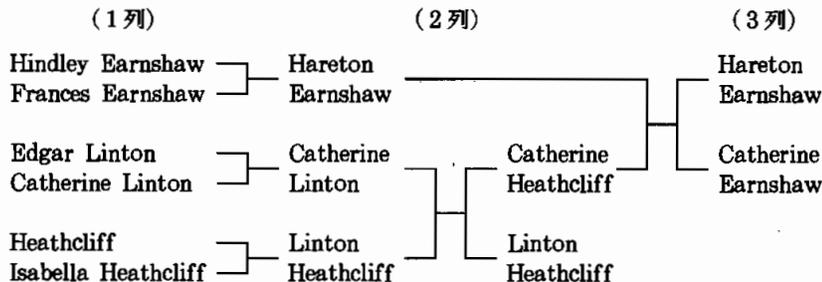
(3) 「だいたい私どもこの土地の者はね、ロックウッドさん、先方からおなじみになって来なければ、他国の人たちと中々おなじみにならないのです」(VI.72)

次にキャサリン・ジュニアとヘアトンの愛は、"He's safe, and I'm free, I should feel well—but you have left me so long to struggle against death alone," she answered. (XXX.307) の He's safe, and I'm free, I should feel well. (この人はもう安全ですし、私も自由の身になりました、私は安心すべきははずです。) が愛の概念と考えられる。自立した愛への決意を表わしたことばである。ヒンドリーの息子としてヒースクリフから徹底的に卑しめられ虐待されつづけたヘアトンとの愛、その成就への過程は、「本」を通じてであった。ヒースクリフから「敷石にされている黄金」と軽蔑的な言葉を投げかけながらも、あくまでヘアトンは「あの人が悪魔であろうとかまわない。どこまでもあの人の味方だ。あの人の悪口を言われるくらいなら、以前のように自分のことを悪く言われたほうがましだ。」(XXXIII, 332) というヘアトンの姿に、キャサリン・ジュニアは理屈では破ることの出来ないヒースクリフとの絆を知り、また怨念を超越した慈悲の姿を教えられることで、ヘアトンとキャサリン・ジュニアの仲はいっそう深まった。だから「ヘアトンは私の若い頃の化身だ。私の不滅の恋人の幽霊だ。私の墮落・誇り・幸福・悩みの幽霊だ」というヒースクリフの告白は、人生観の輪廻を容認した言葉と考えられる。

荒野で生れた愛を持ち続けようとしたキャサリンの愛と、荒野とのしがらみを数々の死と対峙して拭いさり、新しい愛を希求したキャサリン・ジュニアの姿に「愛の二重性」が見られる。

## § 2 死と生

この作品は愛憎をテーマにした恋愛物語だとみられているが、「死」を正面から見つめない限り、まことの作品理解には到達できない。朝夕、牧師館の裏手にある墓地を眺め、また妹二人を亡くしているので、作家エミリーにとって人間の死は至上的命題であったと考えられる。だからこの作品には、さまざまな死が表現されている。たとえば、(1)Hindley Earnshaw と Frances Earnshaw (2)Edgar Linton と Catherine Linton (3)Heathcliff と Isabella Heathcliff などの夫婦の死を中心に、Linton Heathcliff の死と Old Mr. and Mrs. Earnshaw, Old Mr. and Mrs. Linton の死を描いている。(1)~(3)を図式化してみると次のようになる。



この図式化の中で注目すべきは「生と死」の関連的対象が数々みられることである。そのいくつかを列挙してみる。

(ア) 1列の三組の中で注目すべき組合せは故アーンショウ氏の偏愛をうけて育ったヒースクリフと、同じく故リントン氏の偏愛をうけて育ったイザベラの結婚である。その後、夫の虐待に耐えかねて *Wuthering Heights* を去ったイザベラは、息子リントン・ヒースクリフを密かに出産する。彼女は息子を女手ひとつで12年間偏愛して育てる。その結果、息子リントンは女性的な感化 (lass 化) を受けた青年となる。

(イ) 1列のフランセス・アーンショウは息子ヘアトン・アーンショウを出産してすぐ亡くなる。同じくキャサリン・リントンは娘キャサリン・ジュニアを出産後すぐ亡くなる。

(ウ) 昔、ヒースクリフは義兄ヒンドリーから「この乞食野郎の生意気め！お父様のものをすべてだまし取りやがって！」と屈辱的な言葉をかけられたり、キャサリンから「あんまり隣人の物を欲しがってはなりませんよ」と注意された経緯もっている。彼はアーンショウ氏の不慮の死がなければ、溺愛を受けていたであろうし、遺産相続人の一人になれたと考えられる。仮にそうであれば、キャサリンから「彼と結婚すれば品が下がるでしょう」と拒絶されることもなかったと考えられる。彼の出生から生じる彼なりの不条理的な怒りがヒンドリーの全財産を博奕で奪い取り、酒乱にさせては、ヒンドリーの人間性を墮落させる行為につながるのである。更にリントン家の財産相続人であるイザベラを言葉巧みに誑し込んで結婚し、リントン・ヒースクリフをもうけて社会的対象を作り上げる。これで両家の財産を手中にした訳であるが、行為の完璧さを期するため、息子とキャサリン・リントンを高圧的に結婚させる行為までおこなう。この欲望は物質的欲望の達成と、世俗的欲望 (キャサリン2世とヒースクリフ2世の結合) の達成への願望から生じたものである。虚弱な息子リントン・ヒースクリフの死のあと、ヒースクリフの心の中には、「私はそれが遠からず達せられるだろうと信じている。その願望が私の生命を食い尽くしているからね」(XXXIII.336) という自分からは叶えられない精神的欲望だけが残る。その達成のためには己れの肉体の死で贖わない限り成就出来ないことを知るのである。その願望とは彼とキャサリン1世との死の世界での一体化であることは言うまでもない。

(エ) 1列と2列の母子の関係で注意点をあげれば、まずイザベラは息子リントンを出産後、12年間生存している。キャサリンは娘キャサリン・ジュニアを出産後すぐに亡くなるが、娘は12年間 *Thrushcross Grange* の猟園から一歩も外側に出られないでいる。ここに奇妙で、皮肉的な二重性がみられる。

(オ) 次に *Double Catherine* は〈死〉にどのように対処したかについて考えてみる。キャサリンは父の死に臨んでの言葉が象徴的である。故アーンショウ氏は、生前中、よく言った言葉に「お前はなぜいつもおとなしい子になっておられないのかえ？」とやさしく叱ったものであった。キャサリンは、このやさしい叱責に対して「あなたはなぜいつも優しいお方になっていないのです？」と口答えしている。父親の衰えを悟ることの出来ない娘の言葉である。それにひきかえ、娘キャサリン・ジュニアは父親リントンの死と、従兄弟リントン・ヒースクリフの死に際しては、それこそ全身全霊でもってひたむきに看病している。He's safe, and I'm free. (XXX.307) 「この人はもう安全ですし、私も自由の身になりました」というキャサリン・ジュニアの言葉には、彼女の真摯でキリスト教的贖罪の精神を感じるのである。母親とは違って自立した女性の姿を見ることが出来る。〈生と死〉そのものを冷静にかつ客観的に眺めることの出来る女性の姿がそこにあった。このように、Catherine と Catherine Jr. の〈死〉に対する姿に奇妙な二重性がみられる。

## § 3 まとめ

作家 Emily は作品の中で不条理とも思える世界をよく描いている。彼女の母親のマリアが6人の子供を次々と生みながら、次々と死にゆく有様を、Emily ははからずも小説の中で描くことになったわけである。

Emily の描き出す世界は、すべては〈生と死〉の概念と対峙して苦しみもがく姿を設定している。この作品のヒースクリフとキャサリンはこの苦しみもがく姿の原点である。幼少の頃、ヒースクリフは〈亡びの大道〉を、キャサリンは〈救生の鉄かぶと〉を犬小屋に放り投げたことから、彼等の生きる苦しみが始ったとも考えられる。Emily の世界では、この苦しみ・生きとし生きる罪から逃れるためには、他人の死でなく、自分の死でその罪を贖わねばならない。そして死した者の魂は生きる者の内面で生きつづけるという概念によって、救生されるのである。ヒースクリフは虐待しつづけたヘアトンの姿に己れの姿を見つけ、キャサリンはキャサリン・ジュニアの姿に彼女の姿を見つけるのである。Catherine weel とはまさしく再生の概念である。ヘアトンとキャサリン・ジュニアの仲の良い光景に、この愛憎物語の終局と、〈第二嵐ヶ丘物語〉への始まりを感じとることができる。

## 註

※本稿は日本プロンテ学会1993年次大会（1993年10月16日、愛知淑徳短期大学）でのシンポジウム発表の一部に手を加えたものである。

- 1) *Wuthering Heights* by Emily Bronte (Collins Classics, 1964) 以下、本稿の引用文は、すべて、この版による。なお末尾の最初は章、最後はページ数を示す。
- 2) 本稿の和文の引用文は、すべて、世界文学大系28『オースティン・プロンテ』（筑摩書房版、昭和35年1月20日発行）による。

## 参考文献

- Wright J., *The English Dialect Grammar* (Oxford, 1968)  
*The English Dialect Dictionary* (Oxford, 1970)
- Wyld H.C., *A History of Modern Colloquial English* (Blackwell, 1956)
- 廣岡英雄 『方言研究の意味するもの』（関西大学文学論集、第10巻、4号）
- 山本忠雄 『標準英語の出来るまで』（三省堂、1937）

### Summary

The writer Emily often expressed the idea of the absurdity in her story. Her mother Maria one after another had had six babies and had lost three ones. Because of these sad accidents, Emily faced the most harsh death.

Perhaps because of these sadness, Emily contained the agony of life and death into her story. I called this idea "a double structure of the story."

That is, when Heathcliff and Catherine were young children, they threw away the valuable books, '*The Broad Way to Destruction!*' and '*The Helmet of Salvation*'. After these happenings, they were always suffered from the agonies of Life and Death.

After the sadness, Heathcliff is spiritually relieved by his believer Hareton; Catherine is also relieved by Catherine Jr. In the end, after their death, they are truly relieved and both united spiritually. This spiritual idea is also called 'the double structure of the story'.

